

月刊

2013

4  
月号

# みんぱく

— 特集 —

だだ  
だ  
たま  
さ  
れ

だ  
だ  
まし、



誰があなたを一番だましているか 藤田一郎

ひとはなぜだまされるのか 荻野昌弘

騙される人類学者 丹羽典生

見世物小屋の呼び込み口上 鵜飼正樹

世界のトリックスター、大集合!

小長谷有紀 / 福岡正太 / 須藤健一 / 岸上伸啓 / 宇田川妙子 / 吉田憲司

# 課外授業

私が小学校時代を過ごした中国では、課外教育が盛んに行われていた。春は工場へ行って労働体験をし、夏は軍人の指導の下で、本物の機関銃（装弾していない）を担いで行軍訓練を受ける。秋は近郊の農村で、トウモロコシなどの収穫を手伝い、冬になると、寒さを凌ぎやすいようにと録映画を見に行ったり博物館を見学に行ったりという近場の屋内コースになる。

辛い肉体労働や行軍訓練よりは、私は博物館へ行くのが好きだった。戦争関連の展示が多い中、たまに人類進化に関する自然科学系のものもあつたりする。物が極端に不足していたためか、人類進化の展示と言っても、今でもたまに目にする猿が少しずつ直立していき、ついに人間になったという漫画風のイラストとほとんど同じスタンスで、絵とベニヤ板で作られた猿山から、少しずつ石を握って立ち上がった類人猿が野原に移るようなものだった。

ガラス越しに見て回り、一周すれば、順路先に映画館のような空間が現れる。そこで、一時間弱人類進化史の、アニメーションと記録映像半々の映画を見るのだった。その締めくくりは、周口店しゅうこうてんで発見された北京原人だ。我が民族の祖先がわかつたという、「課外授業の目的達成」的な終わ

## 楊逸

プロフィール  
1964年中国ハルビン生まれ。  
1987年に来日。2007年『ワンちゃん』（文芸界新人賞）で作家デビュー。  
2008年『時が滲む朝』（文藝春秋）で芥川賞受賞。他に『金魚生活』『おいしい中国』『孔子さまへの進言』（以上、文藝春秋）『すきやき』（新潮文庫）『陽だまり幻想曲』（講談社）『楊逸が読む『聊齋志異』』（明治書院）『獅子頭』（朝日新聞出版）。2013年6月『流転の魔女』（文藝春秋）刊行予定。

り方なのである。お陰で、人類の起源がもつと古い時代にまでさかのぼれるようになった今でも、私はまだ頑なに北京原人しがついてる。

恐竜展もあつた。もちろん恐竜の化石とかの展示がなく、絵とベニヤ板で作られた恐竜の擬似世界を「堪能」したあと、アニメーションと記録映像半々の映画を見るという人類進化の展示と同じパターンだった。

昨年の夏、トロントへ行った際、恐竜展をやっている知り、ロイヤル・オンタリオ博物館に行ってみた。大小様々な恐竜の骨組が、現代のスマートな照明に照らされた特製の台の上に展示されていた。大きな博物館だけあって、親子連れのほか、団体で来た小学生が目立っていた。——カナダの小学校にも、嘗て私が受けたような課外授業があるのだろうか。

自分で見て回る子や先生について説明を聞きながら進む子、小さな椅子に座って、スケッチに没頭する子もいた。好奇心の強い年頃だ。博物館で過ごしたこの時間と、得た知識、この子たちの将来にどんな影響をもたらすのだろうかと考えながら、ふと、自分はどういつでも博物館での課外授業を受けられるようになったことに気づき、心が躍り出した。

## 月刊 みんなぱく

4月号目次

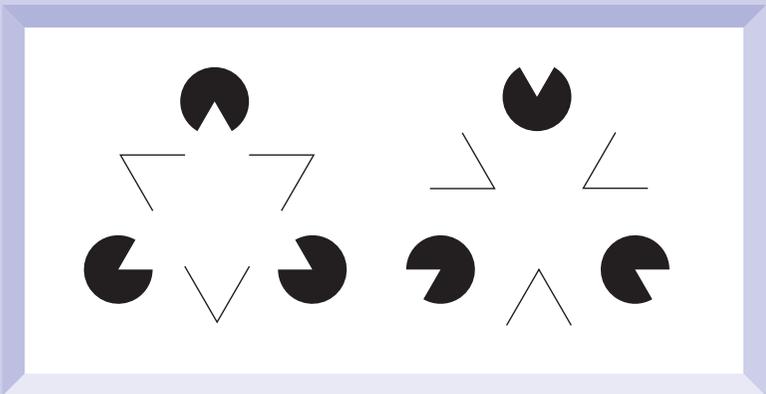
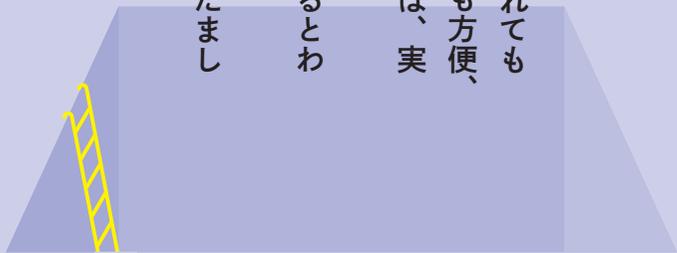
- |    |   |        |  |
|----|---|--------|--|
| 1  | エッセイ 千字文<br>課外授業<br>楊逸                                      |        |  |
| 2  | 特集<br>だまし、だまされ  |        |  |
| 2  | 誰があなたを一番だましているか   | 藤田 一郎  |  |
| 4  | ひとはなぜだまされるのか<br>——切っても切れない社会と詐欺の関係                          | 荻野 昌弘  |  |
| 5  | 騙される人類学者  | 丹羽 典生  |  |
| 6  | 見世物小屋の呼び込み口上<br>——舌先三寸でコマす                                  | 鶴岡 正樹  |  |
| 8  | 世界のトリックスター、大集合！<br>小長谷 有紀／福岡 正太／須藤 健一<br>岸上 伸啓／宇田川 妙子／吉田 憲司 |        |  |
| 10 | 似たモノさがし<br>だましの道具<br>久保 正敏                                  |        |  |
| 12 | みんなぱく Information   |        |  |
| 14 | 地球ミュージアム紀行<br>エチオピア初の私立博物館<br>——シェリフ・ハラール博物館                | 川瀬 慈   |  |
| 16 | 多文化をあきなう<br>「商い」という作業                                       | 藤田 質子  |  |
| 18 | フィールドで考える<br>イラク・クルディスタンを訪ねて                                | 吉岡 明子  |  |
| 20 | 人間学のキーワード<br>人間学  | 丹羽 典生  |  |
| 21 | 異聞逸聞<br>蚊帳か、帳か？   | 白川 千尋  |  |
| 22 | 制服の世界、世界の制服<br>みんなぱくの制服                                     | 樫永 真佐夫 |  |
| 24 | 次号予告・編集後記   |        |  |

# だまし、だまされ

4月といえばエイプリル・フル。ばれてもご愛嬌で笑えるだましもあれば、嘘も方便、やさしい偽りもある。たちが悪いのは、実害をこうむる詐欺やデマ。

人はなぜだまされるのか？ だまされるとわかっていてもだまされたいのか？

さあ、種も仕掛けもございませぬ。だましのトリック、ごろうぜよ。



カニツアの三角形。左図中央には白い三角形があるように見える。右図と左図の中央部を比較すると、左図の方がわずかに明るく感じられる



水彩錯視。この鶏は線の部分だけに色をつけているにもかかわらず、白地部分にも色が拡散して見える(著者オリジナル)



フレイザーのらせん錯視。うずまきがあるように見えるが、ここに描かれているのは同心円である

誰があなたを一番だましているか

藤田 一郎

大阪大学教授

「見える」というできごと

「自分の目で見るまでは信じない」ということばがある。到底信じていけないような突拍子もない話を聞いたときに発せられることばだが、そこには、「この目で見たいものは確かだ」という前提がある。これは本当だろうか。外界世界は目の奥にある網膜に映し出され、そこで光の情報は神経細胞の電気信号に変換される。「見える」という心のできごとがこのときに生じるのであれば、網膜に映っているように世界は見えるはずである。ところが、網膜に映るものとわたしたちに見えるものあいだにはしばしば乖離が生じる。

その顕著な例が錯視である。ある種の特殊な図形を見ると、紙に描かれた図が動いて見えたり、何も印刷されていないところに輪郭が見えたりする。このことは、「見える」というできごとは網膜で起きるのではなく、脳が網膜からの情報を加工した後に起きることを意味している。

錯視図形を見ているとき、わたしたちの脳は網膜像に厳密に従わず、示された図形と違ったものを心のなかに作りあげたのである。

手ぶれのひどいビデオ画像を見ていると気持ちが悪くなる。しかし、ふだん網膜に投影されている外界像は、手ぶれビデオどころではない激しいぶれをもっている。というのは、わたしたちは無意識のうちに、一秒間に二、三回、すごいスピードで目をあっちに向けたり、こっちに向けたりしているからだ。それなのに、見えている世界はびつたり焦点が合い、しかも静止している。この場合もまた脳は網膜像に忠実ではないわけだが、そのおかげで、気持ち悪くもならないし、世界は静止しているという正しい解釈もえている。

わたしは、わたしにだまされる

信じがたいことに、わたしたちはほんの数秒前に見たことを画像として覚えていない。この驚くべき事実を示す変化盲という現象がある。たとえば、カードマジックをしている様子をビデオにとる。その際、カードを大写ししているほんの数秒のあいだにマジシャンが服を着替えても、カメラがマジシャンに戻ったとき、ほとんどの人は服の色が変わったことに気がつかない。「自分の目で見たものは信頼に足る」といえたものではない。目には映っていたはずなのに、目の前の人が二、三秒前に何色の服を着ていたかさえも不確かなのだ。

虚実ないまぜの世界を心のなかに作り上げ、「見えているように世界がある」と思わせている張本人は、わたしたちの脳である。わたしたちをもっとも頻繁にだましているのはわたしたち自身なのだ。

# ひとはなぜだまされるのか

— 切っても切れない社会と詐欺の関係

荻野 昌弘  
関西学院大学教授

## 詐欺師の手口

電話で息子などになりすまし、銀行口座にお金を振り込ませるオレオレ詐欺。最近では、警察官を名乗り、キャッシングカードや現金をだまし取る手口が増えているという。テレビなどで、詐欺の手口について、さまざまな報道が流されているが、なぜだまされるひとが後を絶たないのだろうか。

トーマス・マンの小説『詐欺師フェリクス・クルルの告白』のなかで、詐欺師クルルは、誘惑されたいという欲望は、神が人間に与えた普遍的な欲望であると主張する。もし、そうだとすれば、われわれは誰しも詐欺師の仕組んだ誘惑のわなにはまってしまいう危険がある。とはいえ、誰もがいつ



なりすまし詐欺への注意をよびかけるチラシ。全国銀行協会は、金融犯罪の防止を啓発するポスターやチラシなどを各銀行に配布・掲示している(提供・一般社団法人全国銀行協会)

もだまされるわけではない。だまされる理由があるはずである。

じつは、同じ詐欺でも、詐欺師が息子になりすますパターンと警察官を名乗るパターンではタイプが異なる。前者では、息子は「会社の金を使い込んだ」あるいは「借金の保証人になった」ことになっており、親は息子を助けたいと思うあまり、だまされてしまう。後者では、「振り込め詐欺の犯人を逮捕して、あなたの口座が使われていたことがわかったので、銀行協会の者を向かわせる」といい、協会職員になりすました男が、キャッシングカードを受け取り、預金をすべて引き出してしまふ。この場合、助ける(ふりをする)のは、詐欺の被害者ではなく、詐欺師のほうである。

## 詐欺と救い

ただ、いずれの場合にも、被害に遭っている者を助けるという物語が背景にある。つまり、詐欺に遭うのは、窮地におちいった誰かを救いたいときか、救ってもらったと信じ込み、たいへんありがたいと思うときなのである。

もうひとつの特徴は、詐欺師が語る(騙る)物語では、助ける立場にあるのは、社会のなかで助

ける責任があるとされているひとびとだという点である。親は子を助け、警察官は市民を救う責任がある。詐欺師は、社会的責任を果たすよう促すか、みずから果たしているよう装うことで、ひとをだましていくのである。ひとびとがそれぞれの立場に応じた責任を果たすことで社会が成り立っていることを、詐欺師は直感的に理解しており、この理解に基づいて、ひとをだますしかけを作り出す。

## 詐欺の比較文化

誰が、いかなるときに誰を救う責任があるのか。それは、倫理や宗教と深くかかわっている。また、法や家族制度とも結びついている。宗教、法、家族制度が時代や社会によって異なる以上、詐欺師の戦略も、時代や社会によって差が出てくる。

民俗学者の宮本常一は、『忘れられた日本人』のなかで、文字を読めない村人たちは、詐欺の格好のえじきになったと指摘している。それは、村人たちが、「人を疑っては生きて行けぬものであった」からだという。それでは、文字を習い、真と偽を明確に区別する習慣が身につけば、詐欺がなくなるのかといえ、そうとはいえない。『方法序説』のなかで、すべてを疑ったあとに疑う自分だけはたしかに存在すると気づき、「われ思う、ゆえにわれあり」と説いたデカルトを生んだ合理主義の国フランスでも、なりすまし詐欺は頻発している。たとえば、電話による詐欺(仏語でFraude téléphonique)は、日本同様頻繁に起こっており、公共機関なども注意を喚起しているが、被害者が減る様子はない。詐欺はどこにでも生まれる。そして、詐欺師たちがどのような戦略を立てるのを見ることができるのである。

# 騙される人類学者

丹羽 典生  
民博 民族文化研究部



フィジーにおけるカヴァのひととき

人類学における調査は、対象となる人びととのあいだに築いた人間関係から情報を入手するため、どこか科学的方法として割り切れない側面がある。話を聞き出すとする調査者と、語る現地住民の化かし合いという側面がどこかに孕まれていて、騙された人類学者の筆頭として話題になった人物といえ、マーガレット・ミードであろう。彼女は、『サモアの思春期』において、アメリカの若者が思春期において感じる性に関して抑圧的なストレスからサモア人は解放されていると唱えて、文化人類学者として一世を風靡した。ところが、一九八〇年代以降に出版されたデレック・フリーマンの研究によると、彼女のサモア文化論は、当時の文化決定論の型に調査データを当てはめたものであること、さらには、データについても、信頼性に欠けるような、たとえばサモアの人びとの冗談を真に受け取った節があるというのである。

調査前に、両者の論争を読んだわたしは、前者はともかくとして後者の冗談云々の部分についてはいまひとつ腑に落ちなかった。漠然とはあるが、いくらなんでもそれくらい見当がつくのではないかと思ったのだ。ところが、ミードと同じ南太平洋の島国で調査滞している際に、ミードに同情を感じたく

なる瞬間に多々遭遇した。フィジーの村のなかではカヴァという伝統的な飲み物を囲んで日夜あることないこと話すが通例となっている。そうした席はよき情報収集の場でもあり、わたしもそのため足繁く通った。ところがそうした席で、フィジー人は真顔で冗談を言うのである。

たとえば、ある夜のカヴァの席で、村長に会いたいと相談をもちかけたことがあった。ある人が車座に加わっていた青年を指さしてこれが村長だと真顔でつぶやくと、まわりの人たちもそれにあわせて彼が村長ということを前提に会話を続ける。村長といわれた本人はにこにこしたまま何も言わないという場面が何度もあった。あとでわかったことは、その青年は村長とはまったく縁もゆかりもない人物で、仕事がないために、始終村のなかでふらふらしていることで有名なだけであった。

滞在が長くなると、この冗談のおもしろみもなんとなく理解できるようになるのだが、当初はからかわれたように愉快ではなかった。もつとも日本人の知人に言わせるとフィジー人の性質というよりは、類は友を呼んだだけということらしい。フィジーの文化と関係しているのか判断するにはもう少し時間がかかりそうである。

# 見世物小屋の呼び込み口上

— 舌先三寸でコマす

鵜飼 正樹 京都文教大学教授



裸電球に照らされた「たこ娘」「かに男」の絵看板

着物を着て、髪の毛をアップした小太りのおばさんが、タオルをかぶせたマイクを片手にがなりたてていた。スピーカーを通した野太い声が、ガンガンと頭にひびく。

「それではこのお姉ちゃん、ウソかマコトか、帯が解かれ着物が脱がされ、全裸、まるの裸で立ち上がる。この不自由な足取りで、今から歩くところからまず見ていただきます」

一九八八年一月、西宮神社のえべっさん。身動きひとつできないような人ごみをかきわけ、やつとこのことでたどりついた見世物小屋の前で、呼び込みをしていたのが、安田興行社の安田春子さんだった。

## コマすとガマすのあいだ

春子さんの頭上では、「たこ娘」「かに男」と大きく書かれた絵看板が、裸電球に照らされていた。カニの甲羅を背に、こちらをふり向いた男の顔はなぜかバタ臭く、着物姿に日本髪で白い歯をのぞかせてほほえむ娘の足は、畳の上にくぐりにやりと伸びている。

もちろん、こんなタコ娘やカニ男が見世物小屋のなかにいるはずもない。にもかかわらず、たお客さんから石を投げられて、つぶされた小屋もあつたらしい（安田興行社ではない）。

## お客さんとのかけひきのおもしろさ

じつさい、安田興行社の見世物小屋では、だまされたから入場料をタダにしろ、などと毒づくお客さんはいなかった。小屋のなかのタコ娘については、企業秘密でもあるのでくわしくは書かない。まあ、そんなふうに見えなくもないかな、というぐらいのものだ。小屋に入ったお客さんは、しばらくタコ娘を気にしているが、そのうちに舞台で演じられる人間ポンプや犬の曲芸のほうに見入ってゆく。そして、それなりに納得して、入場料を払い（見世物小屋は「お代は見てのお帰り」方式）、小屋を後にする。それは、人間ポンプというインパクト充分な出しものに納得したからでもあろうが、タコ娘の存在を期待してしまつたお客さんの側にも、春子さんの口上に「コマされた」共犯者意識のようなものがあるのではなからうか。

小屋のなかで人間ポンプを演じていたのは、ご主人の安田里美さんである。碁石を飲み込み、注文に応じて色や数を自在に出し分け、金魚を飲み込み、生きたまま出す、ガソリンを飲み、大きな炎を噴き出す、といった摩訶不思議、迫力満点の身体芸だ。

里美さんは一九九五年、七十二歳で亡くなった。里美さんの死後、安田興行社はお化け屋敷の興行が中心になり、見世物を興行す



安田春子さんの口上に集まる人びと

に来ることも、「コマす」といわれる。「説得し、納得させる」というニュアンスが、「だます」よりも強いよつなのだ。

おもしろいことに、見世物小屋では、たちの悪いウンをついてだますことは「ガマす」といって、「コマす」と区別している。たとえば呼び込みで「いま美空ひばりが見に来てます」という。ドットとお客さんが入る。しかし美空ひばりはなかにいない。お客さんが文句をいってくる、「すみません。もう出て行きました」。あまりの「ガマす」手口に、怒っ



着物姿で呼び込みをする安田春子さん

ず、けたたましく鳴らされるベルの音にせかされるように、お客さんは小屋のなかに吸い込まれていく。

見世物の世界では、春子さんのように、口上でお客さんを小屋のなかへ誘い込むことを「コマす」という。因果の物語にのせ、絵看板に描かれた生物学的にはありえない存在が、小屋のなかにいるがごとくに、口上で語る。それは、はっきりいえば、お客さんをだますことである。

ただ「コマす」は、「だます」とは微妙にちがう。たとえば、テレビ局から出演の交渉することはほとんどなくなった。お化け屋敷でも春子さんは呼び込みを担当している。あの野太い声は健在だ。

しかし、お化け屋敷の呼び込みはもの足りない、春子さんはいう。「滑稽怪談、お笑いお化けの会場はこちら」「お化け見る人はよおいで」といった同じフレーズを繰り返すだけのお化け屋敷の口上では、目の前に集まつたお客さんを「コマす」腕の見せどころが少ないというのだ。

舌先三寸、「ガマす」手前で寸止めする。あの春子さんの名人芸を、もう一度聞ける日は来るのだろうか。



火を噴く人間ポンプ・安田里美さん

# 世界のトリックスター、大集合!

秩序うっちゃり、規律もほっぽり。

ぺてん、冷やかし、とんちに諷刺。いかさま、さかさま、困ったやから。それでもなぜだか、憎めない。天下御免のいたずらもの。



## ワタリガラス

ワタリガラスの仮面  
カナダ 民族：クワクワカワク  
標本番号 H0009848

私は北アメリカ北西海岸地域の創造主であるワタリガラスだ。お前たちやお前たちが食べる鳥獣や魚を創りだし、狩りのやり方を教えたのはこの私だ。むかし、お前たちは私を尊敬し、私の仮面を作り、儀礼をし、正しく生きたものだった。だが、最近はず私を敬わず、美女の尻を追い、ねたんだり、喧嘩をしたり、だまそうとばかりするのだ。何、お前たちは私の真似をしているだけだ。ちがう、この私がお前たち人間の真似をしているだけだ。

(岸上伸啓 民博 研究戦略センター)

わしはバダルチン。モンゴルの民話に登場する托鉢僧(たくはつそうじ)じゃ。歩いて旅をしながら人の家で食にありつく。「ええ、不思議なことがあるもんだ。ところ変われば、しな変わるというけれど、キビの煮立ちまでちがうとはね。うちのほうでは、キビは押し合いへし合いけんかをするもんだが、おたくのほうでは、離ればなれになつて呼び合合つてるよ!」ひねくれもんのわしにこう言われて、クスッと笑っておかわりを出すか、むかついて追い出すか、それはあんだ次第じゃよ。

(小長谷有紀 民博 民族社会研究部)

## バダルチン



バダルチンは、こんなふうには野宿することもある  
絵画「モンゴルの一日」(模写)より  
モンゴル 標本番号 H0224333

「笛の音が響く〜」。わしの名はスマル。ジャワ島の伝統音楽ガムランを聴くと、ついつい踊りだしてしまふんじや。わしが登場する人形芝居ワヤンは、無形文化遺産にも指定されたと聞いとるぞ。わしが醜(みにく)いって? ぶだんはおかしなことばかりやつとるが、じつは人間界をまもるために天界からおりてきたんじや。わしの主人たちは、ピンチになるとわしの助けを求めろぞ。あく、いい加減、おろかな人間はほつとして、昔の美男子にもどりたいもんじや。

(福岡正太 民博 文化資源研究センター)

## スマル



スマルの影絵人形  
インドネシア  
標本番号 H0004143

オイラはずるがしこいネズミ。ある日、陸ガニと一緒に航海に出たんだが、食べ物と占めにするオイラへの仕返しで、カニはカヌーに穴をあけて逃げやがった。おぼれるオイラをみかねて、タコが頭にのせて島へ運んでくれたが、あんまり見事なつるつる頭なんで、ちよいとひっかいてやったんだ。はげ頭をあざ笑われたタコは、今でも海のなかでオイラを待ち伏せしているらしいよ。

(須藤健一 民博館長)

## ネズミ



ネズミを助けるタコの木彫  
トンガ  
標本番号 H0004757

※ネズミ風の擬餌については、本号10-11頁「似たモノさがし」にて紹介

俺は16世紀ごろイタリアで生まれた仮面即興劇コメディア・デッラルテの人気者、アルレッキーノ。道化師、ペテン師などとよぶ者もいるが、俺の仕事は、偉そうな軍人、金持ち、学者さんたちの化けの皮をはがすこと。その手際に観客はいつも拍手喝采(かっさい)だ。現在のイタリアでも、俺の後輩にあたるコメディ俳優やお笑い芸人が政治家たちをおちよくっているとか。でも、今の政治家のなかには俺様も顔負けのペテン師もいるからねえ。がんばれよ、後輩!

(宇田川妙子 民博 民族社会研究部)

アルレッキーノ  
Maurice Sand, *Masques et bouffons (Comédie Italienne)*,  
Paris: Michel Lévy Frères, 1860より

## アルレッキーノ



## ヤヤイ



ヤヤイ  
仮面は、隣国ナイジェリアで購入したアメリカ製の布製怪物マスクに後から赤いま取りを縫い付けたもの。肩にかけた袋にスリとったものをつめていく。エュモジョック、カメルーン。1996年1月筆者撮影

オレっちはヤヤイ「泥坊野郎」さ。アフリカはカメルーン、ナイジェリア国境近くに住むエジャガムだ。仮面結社オクア・アメットの仮面舞踊の場が、オレっちの「仕事場」だ。観客が、男仮面と女仮面の舞踊に見とれているうち、オレっちは踊りの場に飛び込んで、手当たり次第にスリを働く。もちろん、観客は大混乱。踊りの場は、歓声・悲鳴に包まれて、大盛り上がり。観客も皆、オレっちがスリを働くことは百も承知だから、ここはオレっちと観客のばかしの場となる。いや、仮面舞踊は楽しいぜ! あんたも一度きてみなよ。

(吉田憲司 民博 文化資源研究センター)

似たモノ  
さかし

似てるけどどこか違う、  
似てないようでどこか似てる。  
いろんな工夫や思いを映す  
みんなの所蔵資料

# だましの道具

久保 正敏 民博 文化資源研究センター

おおつびらに人をだましてよいという、エイプリル・フール。諸説あって本当の起源は不明だが、年に一度と限らず、普段の生活で苦し紛れに我が身を守るうそは哀しくも可愛げがある。一年間ついできたそんなうそを、誠実な人柄で知られた菅原道真の力によってまことに替え、また良くない出来事をうそに替えるという「鸞替(うそかえ) 神事」が、いくつかの天神さんで年明け一月におこなわれる。参詣者のあいだで、場所によっては「替えましよ、替えましよ」の掛け声とともに、うその語呂合わせで、菅原道真の愛鳥だったスズメ科の烏ウソの人形土鈴、張り子、あるいは、大阪天満宮ではお守りを交換する⑤⑥。

悪知恵をめぐらしてきた。漁労で使う擬餌、擬餌針もそのひとつ。タコを捕らえるポリネシアの擬餌や擬餌針については、本誌一九八一年八月号に、石毛直道氏(後のみんなの第三代館長)による解説がある⑨。他にも世界各地で使われる擬餌や擬餌針には、小魚や虫の動きや色、光るものに反応するといった、漁の獲物それぞれの性質に合わせた工夫がみられ、同じ獲物を対象とするものは形や機能が似ているが、その素材は地域の生態環境により異なる①②③④。

でのデコイ作りの第一人者は、みんなの展示場「世界をさわる」コーナーにタッチカービング作品が展示されている内山春雄氏である。意外なところでは、オーストラリア・アポリジニの使う狩猟用の回帰型アーマランも、じつは水鳥をだまして捕らえるためのもの④。水辺に集う水鳥の上空を円弧状に飛ばし、猛禽類が襲ってきた!とだまされて手前に逃げてくる水鳥たちを捕まえるのである。人をだまし、人にだまされるのはコミュニケーションの一部であり、それ自体が文化とみなせるし、動物をだます手練手管もまた、地域性を反映した文化の範疇だろう。



- ① 擬餌 (タコ)、神奈川県三浦市、幅 3.6cm、H0038185
- ② イカ釣り用擬餌針、山口県大島郡周防大島町、幅 1.7x 奥行 5.7x 高さ 1.9cm、H0018861
- ③ カツオ釣り用擬餌、ソロモン諸島、幅 1.7x 奥行 9.9x 高さ 2.8cm、H0124862  
柄が牛の骨、針の部分がべっ甲、糸がイケビの繊維。竹竿につける。通常3人くらいでカヌーに乗って、カツオ漁にでる。
- ④ プーメラン、オーストラリア、幅 6.3x 長さ 56.4x 厚み x1.3cm、K0001748
- ⑤ 土鈴 (鸞鈴)、福岡県太宰府市 太宰府天満宮、幅 6.3x 奥行 6.3x 高さ 7.7cm、H0142711
- ⑥ 鸞人形、愛知県名古屋市 桜天神、幅 1.3x 奥行 1.7x 高さ 5.2cm、H0014761
- ⑦ 野鳩猟用のおとり (デコイ)、雌、フィンランド、幅 12x 奥行 36x 高さ 16cm、H0002909
- ⑧ 擬餌針、長崎県平戸市、幅 3.9x 奥行 14x 高さ 2.4cm、H0026849
- ⑨ タコとり用擬餌、トンガ、幅 7.6x 奥行 34x 高さ 8.7cm、H0004758  
ネズミを模したものだが、その理由は、本号8頁で須藤健一館長が解説している。

日本の文化展示「祭り」と芸能」「日々の暮らし」が新しくオープン  
みんなくでは、全ての展示場を順次、刷新していく計画をすすめています。このたび、本館展示場「日本の文化」展示の一部が3月22日(金)に新しくなりました。みんなくで日本を再発見してください。

特別展

「マダガスカル 霧の森のくらし」

会期 6月11日(火)まで  
会場 特別展示館1階

関連イベント

◆みんなく映画会  
「文化とはなにか——マダガスカルの生活文化、マダガスカルの音楽文化」

▼5月11日(土)「ザフィマニリススタイルのゆくえ」

本館の川瀬慈助教の監督作品。ザフィマニリのくらしが変化するなか、無形文化遺産のものづくりがどうなるかを考えます。  
時間 13時～15時(開場 12時30分)

▼5月25日(土)「ギターマダガスカル」  
亀井岳氏の監督作品。故郷へ旅するギタリストを追い、生活に深く根ざしたマダガスカルの音楽文化を紹介いたします。劇場公開前作品の貴重な試写会です。  
時間 13時～16時(開場 12時30分)  
以上映画会の開催場所 講堂(先着450名)  
※当日10時から講堂入り口にて整理券を配布  
※申込不要、参加無料

◆ワークショップ(要展示観覧料)  
「ザフィマニリの家壁文様を彫ろう」  
※毎日開催、当日受付、参加無料

「ザフィマニリの文様を編もう」  
※毎日開催、当日受付、参加無料

「ザフィマニリの敷物を編もう」  
4月1日(月)、15日(月)、  
5月3日(金・祝)、20日(月)、31日(金)、  
6月11日(火)  
時間 14時～16時30分  
(おはなしの時間15時～15時30分)

◆ミニレクチャー(要展示観覧料)  
※毎週月曜日開催(予定)、自由参加  
参加無料

◆みんなくセミナー  
左のページをご覧ください。

◆みんなくウィークエンド・サロン  
詳細は本誌24ページをご覧ください。

企画展  
「アリラン——The Soul of Korea」

韓国国立民俗博物館で2012年に開催された「アリラン展」が世界を巡回します。その最初の展示を大阪にある本館で開催します。  
会期 5月2日(木)～6月11日(火)  
会場 企画展示場B

「アマゾンの生き物文化」(仮称)  
サルや鳥などをペットにして飼い慣らすなど、地球最大の熱帯林を持つアマゾンと人とのかわりを紹介します。  
会期 5月23日(木)～8月13日(火)  
会場 企画展示場A

体験プログラム  
「賢女文化にさわる」

盲目の旅芸人である賢女の歴史や役割について、秋山郷の復元民家内で実際に資料にさわったり、賢女唄を聴くことにより理解を深めます。  
日時 4月27日(土) 13時30分～14時30分、  
15時～16時(受付13時から)

会場 日本の文化展示 秋山郷の復元民家内  
※当日先着順、各回定員8名(予定)  
参加無料(要展示観覧料)  
※本プログラムは4月から7月まで、  
毎月第4土曜日に開催します。

みんなく映画会「みんなくワールドシネマ」

2013年度のワールドシネマは、「家族のゆくえ」に焦点をあてます。映画に描かれた姿をとおして、家族のありかたを考えましょう。  
「私の中のあなた」  
日時 5月12日(日) 13時30分～16時30分  
(開場13時)

会場 講堂(先着450名)  
※申込不要、参加無料

※当日10時から講堂入り口にて整理券を配布

◆みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)  
新規メンバー募集

みんなくミュージアムパートナーズは、観覧者にみんなくをより楽しんでもらうために自主的な企画を運営する市民パートナーです。現在、9月から活動する新しい仲間を募集中です。  
応募期間 5月10日(金)まで(50名程度)

お問い合わせ先  
みんなくミュージアムパートナーズ事務局  
新規募集係(国立民族学博物館 社会連携室内)  
E-mail mmp-jimukyoku@dc.minpak.ac.jp  
FAX 06-6878-8256

◆無料観覧日のお知らせ  
5月5日(日・祝)のごものは、特別展本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要ですよ。

※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介

■柄木田康之・須藤健一編

『オセアニアと公共圏  
——フィールドワークからみた重層性』  
昭和堂 定価：4,200円

太平洋島嶼国において、国家と共同体の間のできる多様な社会集団や人びとの集まりを公共圏として分析。現地での多文化的公共圏とNGO等の市民組織の関係をとらえ、新興国における市民社会の欠如というテーゼに疑問を投げかける。

http://www.seni-f.or.jp/shop/

■竹沢尚一郎 著

『被災後を生きる  
——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』  
中央公論新社 定価：1,680円

東日本大震災の被災地の1つ、岩手県大槌町と釜石市で、8ヶ月にわたって人々と共に暮らしながらおこなった観察とインタビューの記録。

http://www.seni-f.or.jp/shop/

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13時30分～15時(13時開場)  
定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第419回 4月20日(土)

特別展関連

マダガスカル 霧の森のものづくり

講師 飯田卓(国立民族学博物館 准教授)

身近な森から伐りだした木の家、その窓にはどこぞの何学的な木彫り、植物繊維から編みだされるさまざまな意匠。マダガスカル山間部のくらしに息づいてきたものづくりは、こんにち国際的な評価を受けるようになりました。次世代に受け継ぐべきものは何か、われわれができる支援は何かを考えます。

第420回 5月18日(土)

特別展関連

マダガスカル 霧の森にくらすひと

講師 内堀基光(放送大学教授)

日本のマスメディアからは「秘境」と呼ばれるマダガスカル。そこにくらすザフィマニリの人たちは、山々によって外の世界から隔離され、自然のリズムにあわせて生活をとんできたようにみえます。でも、彼らの知識がユネスコ無形文化遺産に指定されていることかわかるように、静けさはくらしの一面にしかすぎません。未来をみえつつ、霧の森の現在をお話します。



死者を記念する碑

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室  
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第419回 5月4日(土) 14時～15時

マケドニアの陶器と食文化

講師 ゴルダン・ニコロフ(国立民族学博物館 外国人研究員)

マケドニアの伝統的な陶器作りについて映像を用いて紹介します。その中からとくに、結婚式と墓参りで用いられる二つの儀礼用の酒壺について解説します(通訳あり)。  
※講演会終了後にはゴルダンさんお手製のマケドニア料理を味わいます。

第420回 6月1日(土) 14時～15時

アラビア語圏キリスト教徒のくらし

講師 菅瀬晶子(国立民族学博物館 助教)

『季刊民族学』143号でご紹介したシャーム地方の家庭料理、ムジャッタラを味わいながら、金曜日(日)に菜食を実践する彼らのくらしやアイデンティティについて、お話しします。食文化がもつ、国境や宗教をこえる力や可能性についても考えてみましょう。

東京講演会

会場 モンベル渋谷店5Fサロン

定員 70名(要申込) ※今回は一般の方も参加可能です。

第106回 6月30日(日) 14時～15時30分  
トウバ人たちの住むところ——21世紀の「探検」談  
講師 小長谷有紀(国立民族学博物館 教授)

第82回民族学研修の旅

マダガスカルの森と海を訪ねる

——サザンクロス街道をゆく

7月9日(火)～20日(土) 12日間  
特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」の舞台となったザフィマニリ村を訪ねます。詳細は上記友の会まで。

特別展オリジナルグッズ

いま開催中の特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」のオリジナルグッズをご紹介します。

まずは、クリアファイルと二筆箋です。マダガスカルの森をイメージした緑をバックに、ザフィマニリ手づくりのかわいい帽子が5つ並んでいます。一筆箋は1冊のなかに、5つの帽子にあわせて5種類の箋が楽しめます。気分によって使い分けてください。

もうひとつはスタンプです。ザフィマニリの木彫りの文様と、マダガスカルの言語をデザインしたものがああります。言語のスタンプは、Misaotra(ありがとう)とSaialama(こんにちわ)の2種類があります。

特別展示場内のショップでは、オリジナルグッズや図録(解説書)にクわえ、いろいろなマダガスカルの商品を販売しています。展示をご覧になった後は是非お立ち寄りください。みなさまのご来店をお待ちしております。



特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」図録  
『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』(B4変形判 148頁) 1,955円  
クリアファイル 350円  
一筆箋 380円  
スタンプ(文様)1種類 500円  
スタンプ(言語)2種類 各420円

価格はすべて税込

## エチオピア初の私立博物館 —— シェリフ・ハラール博物館

八〇以上のエスニックグループ、二〇〇以上の言語が存在するといわれるエチオピアでは、多様な価値体系を尊重した文化保護政策の必要性が叫ばれつつある。それと並行して、コミュニティのあいだでは、地域社会主導の文化遺産の管理や展示・表象の気運が高まっている。



### ムスリムの宗教的、文化的中心地ハラール市

エチオピア東部に位置するハラール州の州都ハラール市は、ムスリム（イスラーム教徒）の宗教的、文化的中心地であり、沿岸部とエチオピア内陸部を結ぶ交易拠点として栄えてきた。一六世紀につくられたジュゴルとよばれる門をもつ城壁のなかに入ると、細い路地を行き来する女性たちの色鮮やかな民族衣装が、城壁の白い壁と、真つ青な空によく映えてまぶしい。日が沈むと、どこからともなく、預言者を称える詩「メンズマ」の詠唱が聞こえてくる。城壁のなかの旧市街は、二〇〇六年に「歴史的城塞都市ハラール・ジュゴル」の名で、ユネスコの世界文化遺産に登録された。ここでは、織物籠、製本、貨幣にみうけられるように、独自の優れた物質文化が育まれてきた。フランスの詩人アルチュールランボーが、この街に魅了され、移り住んだ話は有名である。エチオピア屈指の観光地として、国内外のツーリストを魅了するハラール旧市街のなかに、シェリフ・ハラール博物館がある。二〇二一年の一〇月にわたしは、エチオピア初の私立博物館としてスタートしたことで知られるシェリフ・ハラール博物館を訪れた。

### 私立博物館から市民の博物館へ

館長のアブドゥラヒ・アリ・シェリフ氏は、一九九〇年代前半から、ハラール市にちなむ物品を丹念に収集してきた。一九九八年に、アブドゥラヒ氏の自宅が、エチオピア初の個人所有の博物館としてオープンする。ハラールの市民も、「自分たちの文化遺産を自分たちの手で守り保管しよう」というアブドゥラヒ氏の意気込みに共感し、多くの物品を当博物館へ寄贈した。ハラール市民のなかには、普段使っている日用品の文化遺産としての価値を、アブドゥラヒ氏の活動によって気付かされ、それらの収集を始めたものも多い。

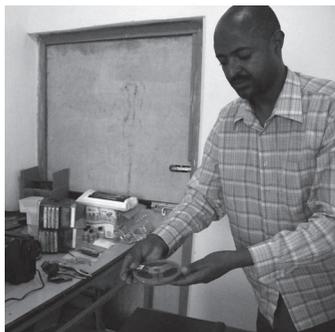
その後、ユネスコとノルウェー政府からの資金援助を受け、当博物館は、アブドゥラヒ氏の自宅から、ハイレ・セラシエが皇帝に即位する前に住んでいた館「ラストファリの家」（一九二一年建築）に移った。さらに二〇〇七年には市営となって、シェリフ・ハラール博物館として再オープンする。当博物館には、この地域に住むハラリ、オロモ、アムハラ、グラゲ、ソマリ、アルゴバ等のエスニックグループに関連する織物、宝飾品類、籠細工品、農器具等の日用品や絵画が展示されている。エチオピアの近代化に多大な貢献をした皇帝メネリク二世のライフルや剣をはじめ、一九世紀の著名な戦士たちの武器や階級記章等、エチオピアの歴史上の重要人物の持ち物も展示されている。またイスラーム法に関連する多くの書物や、ハラール市にちなむ音楽が記録されたオープンリールテープやカセットテープが、何百と所蔵されている。

### 音源の保護

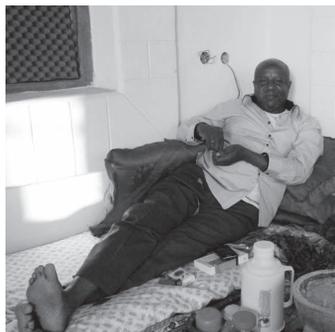
アブドゥラヒ氏が記録してきた音楽は、前述のメンズマの詠唱をはじめ、イスラーム神秘主義の儀礼ジクルにかかわる音楽や、結婚式などの祝祭儀礼で歌われる伝統歌など、その土地の文化と歴史が凝縮した無形文化遺産ともいえる。なかには今ではすでに失われてしまったものもある。しかしながら、これらの音楽を記録したテープのなかには、完全に破損したり、劣化が著しく進んだものが多く含まれる。そんななか、貴重なテープ音源をデジタル化して保管する作業が、イタリア人民族音楽学者シモーネ・タルシタ二氏の協力のもと、数年前に始められた。この作業に必要なリールテーププレーヤーや音の編集ソフトが入ったパソコンは、タルシタ二氏からアブドゥラヒ氏に寄贈された。現在アブドゥラヒ氏は、数名の博物館スタッフとともに、定期的に訪れるタルシタ二氏から音源のデジタル化作業を学んでいる。今後、少しずつではあるが、音源のデジタル化作業が進められ、展示に取り入れられる予定である。近い将来、シェリフ・ハラール博物館の色鮮やかな展示品のなかに、これらの音源がどのように組み込まれて展示されるのか注目したい。

## 川瀬 慈

民博文化資源研究センター



リールテープ音源のデジタル化作業



館長アブドゥラヒ・アリ・シェリフ氏



書物の展示



民族衣装の展示



シェリフ・ハラール博物館

被災地でおこわれる、作業療法活動の一環で生まれた手作りの品々。イベントを通して販売され、現地の状況を入びとに伝える。作品の販売が人びとの交流となるだけでなく、お互いの「何かをしたい」という気持ちを高めることができるという。「商い」も立派な作業療法なのではないか。

## 協力隊経験者、被災地へ

JOCVリハビリテーションネットワーク（以下、当会）は、作業療法士や理学療法士など、障害者支援関連職種で青年海外協力隊（JOCV）へ参加した者によって構成された会である。設立は二〇〇八年、現在の会員数は約一三〇名である。わたしは、二〇〇五年から二年間、ドミニカ共和国に滞在し、作業療法分野の仕事を担当した。帰国後、国際協力に関係する活動を国内でも継続したいと思い、当会に入会した。

二〇一二年三月一日東日本大震災が起きた直後より当会では実施可能な活動を検討し、同年四月から現在まで福島県二本松市の一次避難所および、仮設住宅において支援活動をおこなっている。二本松市には福島県浪江町から避難してきた被災者が現在も仮設住宅で生活をしている。

活動頻度は仮設住宅住民（以下、住民）や関連団体と協議のうえ、毎月二回とした。二〇一二年四月指導に加えて作業活動を順次導入していった。これらの作業活動は回数を重ねるにつれ参加者の様子も受け身から主体的、積極的な態度へと変わっていった。

作業療法士による指導のもと、参加者のアイデアや積極性が出て地域の特色を取り入れた活動になった。このようなかわりによって住民のコミュニケーション再構築が促進されると期待したい。現在の課題は男性住民の参加をどのようにうながすかという点と、活動が継続していくために他団体との連携や資金問題、そしてボランティアが被災地を忘れずに継続した参加をしてもらえるような呼びかけである。

## 「商い」という動機づけ

参加者のなかには手芸を得意とする人が何人もいて、作業療法士が提案する作業をより良い作品になるように工夫していた。そこで作品を作りためてイベントで販売することを提案した。これまで出来上がった作品は各自持ち帰り、家族から賞賛をえられたとの感想を聞いていたが、「商い」にするとなると参加者はみな出来上がりを気にするようになった。より熱心に作品作りに取り組みようになった。またオリジナルの印を作り、作品に判を押すことで自分たちの商品であるという自負も生まれ、作品作りへの意欲が高まった。

作品の販売は、二〇一一年と二二年に東京のJICA地球ひろばで開催された協力隊まつりや日比谷公園のグローバルフェスタでおこなった。「商い」の知識も経験も無いわたしたちは値段設定の仕方や販売の方法すらわからなかったが、見に来てくれた方

月々七月は一次避難所を三ヶ所訪問し、九月からは仮設住宅の集会所二か所へ訪問している。活動内容は、一次避難所では炊き出し、個別対応のリハビリ相談、腰痛予防サポーターなどの提供であった。仮設住宅ではリハビリ相談、集団体操のほかに、二〇一一年二月からは作業療法士による、切り絵、マクラメやヨーヨーキルトなどの手芸、編み物、団扇作り、調理（桜餅、柏餅、肉まんなど）の作業活動を実施した。

## コミュニティの再構築に向けて

被災者の生活の場が一次避難所から仮設住宅に移動した後は、行政やさまざまな団体の支援が行き届いたことで、住民はある程度落ち着いた生活ができるようになった。しかし、プライバシーが保たれた生活の反面として、住民の孤立の可能性が高まることが考えられた。当会では住民の定期的な集いの場として機能するよう、マッサージや生

に、作品の制作背景を説明したり、売り上げは当会の活動を通じて浪江町の住民に還元されることを伝えたりすると、みな大変興味をもち、賛同して作品を購入してくださった。「商い」とおして、多くの人が東北を支援しようという気持ちを持ち、支援するきっかけが欲しいと思っていることがわかった。浪江町の住民と話しをしているときに、日本人は福島のことをもう忘れてしまっているという声を聞くことがあったのだが、わたしたちの経験から、福島を応援する気持ちは少しも弱まっていないと伝えることができた。それを感じていただくために、いずれば作品を製作している参加者にも販売活動に参加してほしいと思っている。

作業療法士は一般にはあまりなじみのない職業だが、リハビリテーション分野の職種のひとつである。体や心に障害のある方や発達期に障害をもった方、成年期や老年期に障害をもった方などに対し、主体的な生活が獲得できるように、諸機能の回復と維持、さらに開発をうながす作業活動を用いて治療や指導援助をおこなっている。日常生活の諸動作や仕事など、人間にかかわるすべての諸活動を「作業活動」とよび、これらを治療や援助、指導の手段として用いている。

作業活動には常に感情が伴っている。作業活動は内的動機づけ、つまり何かをやりたいという気持ちが必要なおこなえない。作業療法士はこの気持ちを高めることが大切だと考えている。「商い」という作業は参加者に内的動機づけをうながす効果があると思われた。そしてそれが、売り手と買い手の心の交流につながっていくのである。



膝掛け（販売ブースに飾った写真）



作業風景



協力隊まつりの販売風景



ヨーヨーキルトのヘアゴム



アクリルたわし



仮設住宅集会所の作業風景



値札作り



# イラク・クルディスタンを訪ねて

吉岡 明子  
よしおか あきこ

一般財団法人日本エネルギー経済研究所  
中東研究センター 研究員

## 初の訪問

イラク北部のクルディスタン地域では、至るところにクルドの民族旗がはためいていた。公用語はアラビア語とクルド語だが、目に入るのも耳にするのも、圧倒的にクルド語が優勢だ。誰と話しをしていても、「我々」といえば、それは「我々イラク人」ではなく「我々クルド人」のことだった。「政府」といえば、それはバグダードのイラク政府ではなく、クルディスタンの主都エルビルに拠点を構える「クルディスタン地域政府」を指している。イラクの政治・経済情勢を調査するため、イラクを訪れたつもりでエルビルの町に降り立ったわたしは、ここはもはやイラクというより、クルディスタンなのだとすることを思い知らされた。二〇一二年五月、わたしにとって初のイラク訪問であり、初のクルディスタン訪問だった。

地域政府の紋章には「1992」の文字が刻まれている。一九九二年の湾岸戦争後、旧フセイン政

内の治安の良さだ。イラクでは残念ながら今もテロ事件は珍しくない。だが、クルディスタン地域に限れば、ここ五年ほど大規模な事件は起こっておらず、町の様子も極めて平穏だ。地域政府はその景観と気候、さらには安全を強調して、イラク国内外からの観光客の誘致に余念が無い。

とはいえ、エルビルの町はクルディスタン地域の南の境界から二〇〇キロメートルと離れていない。テロリストの流入に対する警戒は厳重だ。町のなかのあちこちにカラシニコフ銃を構えた、シムメルガ(クルド兵)の姿があるし、いったん市街地を抜ければ、幹線道路には必ず検問所が設置されて



シタデル(城塞)から町を臨む



買い物客で賑わうショッピングモール。  
2010年12月にオープンした



伝統的なカイセリ・バザール

権が北部の支配を諦めて軍を撤退させて以降、ここは事実上、クルド人の自治区となり、翌九二年には選挙を経て自治政府が形成された。九〇年代は経済封鎖や内戦に見舞われ決して順風満帆ではなかったが、事実上の国造りの試みが進められてきたことは間違いない。九〇年代半ばに教科書がアラビア語からクルド語に切り替えられたときから、域内の学校では「クルディスタンの歴史」が教えられるようになったという。ここでは、「戦後」が始まったのは旧フセイン政権が崩壊した二〇〇三年ではなく、自治が始まった一九九二年なのだ。そして二〇〇三年のイラク戦争後、自治区の地位は憲法で保障された。

## めざましい開発ラッシュ

その自治のスタートから二〇年、イラク戦争から一〇年を迎える今、クルディスタン地域は開発ラッシュの最中にある。町中そっちにもこっちにも建設

いる。駐在員や出張者のために二四時間体制で警備会社と契約している外国企業も多い。

かくして、わたしのような外国人が一人で町をぶらぶらと歩いていても、あるいは武装したボディガードを傍らに連れていても、どちらの光景も珍しくないという何とも不思議な場所になっている。

## 自治の将来

そんな経済発展と治安の良さを誇るクルディスタンだが、課題も山積している。最大の問題はイラク政府との関係だろう。石油産業が域内最大の産業になっている一方で、イラク政府は、地域

工事現場が見えている。二月に再訪した際には、工事現場の数がさらに増えていることに驚かされた。ついでに、駐車スペースを探して右往左往する車の数も増えた気がする。二〇一〇年にオープンしたエルビル新空港には各国から直行便が多数乗り入れ、イラクの玄関口のひとつになっている。外国人ビジネス客が泊まるような四つ星や五つ星のホテルの選択肢も、少ないながらも増えてきた。携帯電話の普及もめざましい。昔ながらの伝統的なバザールが軒を連ねる一方で、整地された区画にはドバイと見紛うような高層ビルの完成予想図が掲げられていた。地域政府は石油や天然ガスの開発にも注力している。天然ガスは発電用燃料になり、イラク全土の電力不足は未だ深刻ながら、ここでは季節によって二四時間の電力供給が実現している。

## 平穏と緊張が混在する町

この開発ラッシュを支える要因のひとつが、域政府が独自に外国企業と契約を結んで開発をおこなっていることに強く反対している。どこまでがクルディスタン地域かという境界も未決着だ。境界線上でイラク軍とシムメルガがならみ合っただけ即発、という事態も再々起こっている。

この先の将来、クルディスタンが本当の独立を目指すのかどうかはわからない。だが少なくとも、長い時間をかけて手に入れたこの自治を、彼らはそう簡単には手放さないだろうということだけはひしひしと伝わってくる。ということは、イラクはこの地域とどう折り合っていくのか、この先も頭の痛い課題を抱え続けることになるのだろう。

人間学ということばから何をイメージされるだろうか。一般的には、人はいかに生きるべきかという指針や人格の修養、あるいは社会人として役立つような処世訓を学ぶこと、というあたりだろうか。哲学に関心がある人であれば、人間の本質に関する探求や思索などといったことを思い浮かべるかもしれない。

本シリーズのタイトルとして掲げた人間学は、まったくそうした意味と関係がないわけではないが、少し違っている。人間とは何かという有史以来の問いを根本から考え直して、時代に必要とされているような人間観を編み出すことを目指す学問的試みを意味することはとして使っている。

たとえば、近年の生物進化の研究では、動物と人間を区分する根本的な条件と考えられてきた感情や知性などの領域にまで踏み込んで、そうした人間の精神活動までもが生物進化の論理と関連していることをあきらかにしている。アンドロイドに関する工学的研究は機械を人間にいつそう近づけることを可能にし、生物工学がクローン生物を実現させることで、かつてであればSF的な夢物語であったことがなれば現実となりつつある。

このように、人間らしさの輪郭が曖昧となり、アンドロイドやクローン生物が人間とともに暮らすような世界もそう遠くなくなってきたいま、人間とは、あるいは人間性とは何を意味しているのかという疑問は、人びとの生活にとっても身近なものになりつつある。

# 人間学

## Anthropology

丹羽 典生 民博 民族文化研究部

明日から使える!

## 人間学の キーワード

今日「Anthropology」は人間学と人類学というふたつの訳語

がある。哲学においては、人間性の本質を探究する学問としての人間学と訳される。一方で、人間に関する総合的の科学としては、人類学と訳される。総合的というのは、たとえばアメリカにおける人類学では、いまでも形質、文化、言語、考古学の四つの下位分野を含んだ学問とされているように、生物学的特性から文化としての人間までを対象としているためである。しかし、人間学と人類学の両者は「いずれも、Anthropology」の原義の「人間に関する探求」という意味で、根は同じものである。新しいテクノロジーが生まれ、学問の在り方も変化したいまの時点で、「人間とは何か」という根本的な疑問に取り組むには、これまでの人類学の学問的あり方にとどまっていたは十分でないかもしれない。たとえば、哲学、倫理学、経済学、心理学から生物学、物理学までに至るそれぞれの学問の先端的な領域で、お互いの知恵を出し合い、ともに考えることでようやく答えに近づけるのであろう。その意味で、人間学とは、人類学の本来の意味に立ち返る、学際的で、野心的な試みとなる。

人類学はもとより、人文社会科学などの学問の危機が語られるようになってから久しいが、さまざまな領域のそこかしこで先端的な思索や実験が重ねられ、あらたな知識や斬新な視点<sup>ざんしん</sup>をわたしたちに与えてくれるような学問上の成果が、生み出されつつもまた事実なのである。「人間学のキーワード」を通じて、新しい学問のかたちとその面白さをより身近に感じてもらいたい。

# 蚊帳か、帳か？

しらかわ ちひろ 白川 千尋 大阪大学 准教授

幕か、テントか？

数年前、初めてラオス北部の少数民族タイダムの村を訪れたときのことである。小さなよろず屋の店頭にならんでいる品々を物色して立ち去ろうとしたとき、店の奥のスペースに黒い幕のようなのが吊してあるのが目に入った。近づいてよくみると、それは黒い布を箱形に縫い合わせたテントのようなものだった。

直後に教えられてわかったのだが、それはテントなどではなく、タイダムの人びとの伝統的な蚊帳であった。ところが、当初わたしはそれが蚊帳であることにまったく気がつかなかった。わたしのもっていた蚊帳のイメージからかけ離れていたからである。大方の読者の方々も同じようなイメージをおもちだろうが、それまでのわたしには蚊帳といえば細かな網状のものというイメージがあった。しかし、よろず屋で生まれた初めて目にしたタイダムの蚊帳はいえ、透けていない布でできていたのだった。



よろず屋で目にしたタイダムの蚊帳。店の奥もプライベートな空間になる

蚊帳がつくる密な空間

日本でかつて盛んに使われていた蚊帳はご承知のとおり網状のものである。通気性が良く、気温の高い夏の夜でもなかで快適に過ごせる。それに比べてタイダムの蚊帳は通気性が悪く、いかにも暑そうである。しかし、メリットもある。気温の高いときはさておき、気温の低いときには通気性が悪いので、かえってなかが暖かくなる。

加えて、透けないため、外から蚊帳のなかを見通すことができない。タイダムの人びとは、夫婦とその両親などがひとつの部屋で寝起きをともにしている場合が少なくない。こうしたなか、夫婦はなかが見えない蚊帳を使うことで、自分たちだけの空間を確保することができるようになる。

後になって日本では、蚊帳は帳とばりとよばれる場合があることを思い出した。間仕切りのために垂らす布や何かを覆い隠すものを帳とばりというが、先に触れたタイダムの蚊帳のメリットを考えると、それは蚊帳ではなくむしろ帳とよぶべきものなのかもしれない。



昨今、制服少女たちはメディアをにぎわし、各地で地域振興キャンペーンをも盛り上げている。制服フェティシズムが、現在ほど大きく消費を刺激している時代はかつてなかったのではないだろうか。当然ながら、制服、あるいは制服的なものは古今東西に遍在してきた。制服を民族学してみようではないか。

## みんぱくの制服

梶永真佐夫 民博 研究戦略センター



現在では動きやすい制服が採用されている。受付だけでなく展示場の見回りなど、立ち仕事もふえたせいもある

みんぱくで研究者の服装は自由である。館員の身だしなみを重んじた初代館長梅棹忠夫は、館員がいかにも研究者っぽく白衣で館を歩くのは嫌だったとさえ聞く。だがご存じのように、みんぱくにも制服の人たちがいる。本コーナーの第二回は、そう、来館者を笑顔で迎えるあの人たちの制服についてである。

### 一六年周期のテーマ

本誌でみんぱくの制服を取り上げるのは一六年ぶりである。

そのころ、なにがあったのだろうか。覚えていらっしゃる方も多いかもしれない。開館二〇周年（一九九七年二月）を目前にして、みんぱくの

その前の記事はというと、くしくも、さらに一六年前の一九八〇年一月、

開館三年目にして、はじめて案内スタッフ（正式には「展示案内学習支援業務担当」）の制服がかわったときである。グレーのワンピースから、ワインレッドのブレザー・スーツになった。

その半年まえの三月号でも、「縁の下の力持ち」という記事で、清掃、警備案内所のかたがたの仕事が紹介された。しかしこのときクローズアップされているのは、なんと警備員さんの制服であった。キャプションに「この仕事にはきびしさとやさしさの両方がひつようだとか」。別の写真のキャプションには「いちばん目がはなせないのが中・高校生の団体とのこと」とある。当時は家庭でも教育現場でも、権威と管理に叛旗を翻した若者たちの暴力が問題になっていた。

お気づきのように、現在の展示場は、案内スタッフの女性たちが見回っている。もう腕つぶしは必要ないだろうということになったのか。この二〇

大改修がおこなわれた。映像の広場、ものの広場、南アジア展示場が設けられ、隣接する東南アジア展示場、言語展示場も全面改修され、あちこちに休憩所が設置された。表示板もあかるくシンプルなデザインに変更された。軌を一にして、案内所、ミュージアム・ショップ（今はエプロンだけだが、かつては制服着用！）、警備の方々の制服も、あかるく、あたたかい色彩に一新されたのである。

そのときの記事のタイトルが「開館二〇周年にむけてリフレッシュ」（一九九七年二月号）。ページ中央に制服姿の写真もある。DCブランドの隆盛やボディコンブームに象徴されるバブルの狂騒はすでに昔のはなしとなり、シンプルで廉価な衣料品を提供する「ユニクロ」が台頭しはじめたところだった。

年の変化である。

### 制服を着てみる

残念ながら案内スタッフの初代の制服は、当時の現場の写真掲載できなかつた。「誰もモデルがいないなら自分が着る」と筆者ががんばってみたが、みんぱくと本誌の品位を損なうと強硬に拒絶され、ひきさがるほかなかつた。身にまとうことで時代感情のようなものが体験したかつたと言え、いかにも言い訳がましいだろうか。ある制服を着ること、それはある時代の、ある社会の脈絡や役割に自分をあてはめること、あやふやな「わたし」がなにかになることなのである。

民族学者はそれぞれのフィールドで、どんな制服の人たちと接しているのだろうか。その制服から、なにが見えてくるのだろうか。



20周年を機に警備員の制服も一新された。案内スタッフの制服はカラフルに（本誌1997年2月号より）

1997年



当時は「案内嬢」とよばれていた。慎ましやかに清潔なイメージの制服（本誌1980年11月号より）



1980年



初代のみんぱく案内スタッフの制服から、70年代のスーパーヒーローを思い出す人がおおい

1977年 みんぱく開館

4月

みんぱくウィークエンド・サロン

# 研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！  
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、  
話題や内容は実に多彩。  
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

7日  
(日曜日)

話者：上羽陽子（国立民族学博物館 准教授）  
話題：ザフィマニリの編みもの  
会場：特別展示場

14日  
(日曜日)

話者：池谷和信（国立民族学博物館 教授）  
話題：マダガスカルにおける狩猟採集民のくらし  
会場：本館展示場内ナビひろば

21日  
(日曜日)

話者：崎山理（国立民族学博物館 名誉教授）  
話題：マダガスカルの言語文化のルーツと変化  
会場：本館展示場内ナビひろば

28日  
(日曜日)

話者：吉本忍（国立民族学博物館 教授）  
話題：マダガスカルの織機と織物  
会場：特別展示場

## 1年間みんぱくに何度でも入館できる 「みんぱくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
  - ◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
  - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

## 編集後記

春の陽気に蝶の舞い遊ぶ四月。私もついに羽化して、ヘンシュウチョウになってしまった。これを機に、小誌もプチ変身。「台割り」を変え、特集にももう少し彩りが加わるようカラーページの位置を移した。さらに「似たモノさがし」、「人間学のキーワード」、「制服の世界、世界の制服」の三つの新しいコーナーが誕生した。「似たモノ」は、ちよっとおもしろい切り口で通文化的にみんぱく所蔵品を紹介するページ。「人間学」の欄は「知ってるつもり」になっている専門用語を身近な事例で分かり易く解くことを目指している。「世界の制服」では、服と時代と地域となりわいと自己認識のつながりに迫る。

本号の編集作業が終わりかけようとしているとき、山口昌男氏の逝去を新聞で知った。まさに「トリックスター」——知的挑発者、創造的いたずらもの——として、文化人類学のみならず日本の人文学・芸術界を牽引してきた方だ。山口氏ほどの大物トリックスターになりきる勇氣はないが、一委員として小誌の編集に関わってきたイモムシ、サナギ期（実は連続8年!）の間に蓄えた経験をバネに、遊びゴコロのある雑誌づくりに励む所存である。（山中由里子）

- 表紙：張り子人形（シヨロシヨロ狐） 標本番号：H0122612
- 地域：日本、鳥取県
- 山のふもとのシヨロシヨロと水が流れ落ちる所で、美しい娘に化けて人をだましていた狐にちなむ。

### 次号の予告

### 特集 日本の文化

月刊みんぱく 2013年4月号

第37巻第4号通巻第427号 2013年4月1日発行

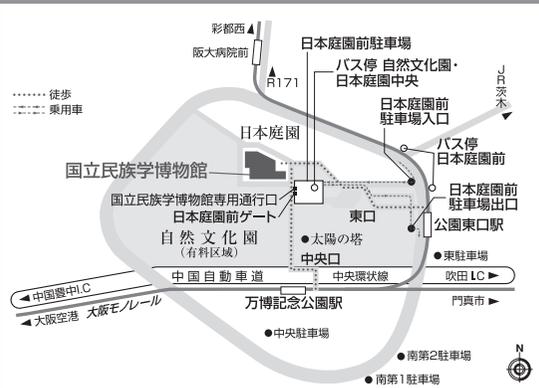
編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂  
編集委員 山中由里子（編集長） 榎永真佐夫 久保正敏  
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 野林厚志  
編集アドバイザー 山内直樹  
デザイン 宮谷一孝  
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団  
印刷 日本写真印刷株式会社

- \*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
- \*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。



みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

